様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　22　年　5　月　12　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520572
研究課題名（和文）　幕末・維新期における藩祖顕彰の総合的研究

研究課題名（英文）　The research of venerating the lord of Choshu in the end of Tokugawa period

研究代表者
岸本　覚（KISHIMOTO SATORU）
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号：80324995

研究代表者の専門分野：明治維新史
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：藩祖　顕彰　神格化

１．研究計画の概要

本研究では、大名家祖先顕彰の構造的な特質を分析し、幕末・維新期の祖先顕彰が持つ歴史的性格を史料にそくしてあきらかにするものである。全体的な研究構想は、次の三つの視点をもとに展開する。①長州藩のなかからいかに近代の国家祭祀に結びつくような藩祖祭祀・招魂祭・楠公祭祀が浮上してきたのかという点、②いわゆる 19 世紀を通じて大名家に胚胎する「復古」的な潮流、③こうした動向と西洋化といわれる問題との関わりである。①②の論点と、③についてはそれぞれ別個の視点から論じられてきたが、両者を踏まえた新たな議論の展開が求められており、本研究はこの点も焦点を当てる。

２．研究の進捗状況

①と②については、調査とその分析をほぼ終え、研究報告、論文などでその一部を公表し終えているところである。全体の進捗状況としては８０％ぐらいの進展を見ることができる。だが、③については新たに日本の神仏分離をフランス革命期の非キリスト教化運動を分析するなかであきらかにする必要が出てきた。前年度申請で不採用となったことで、③についてはできる範囲内で進めるしかない状況である。

３．現在までの達成度

③おおむね順調に進展している。

今までの調査をもとに、昨年度専門領域の最大の学会である明治維新史学会大会において研究報告を行い、その成果を報告した。さらに、藩祖祭祀に関しては論文「幕末萩藩における祭祀改革と「藩祖」」として公表し、招魂祭関係に関しては「大村益次郎」ところで触れることができた。

４．今後の研究の推進方策

研究の進展にともない、神仏分離をめぐる新たな研究課題が浮上し、その独自の視角を進めるためにはフランスの非キリスト教化運動の習得が不可欠ではないかと考えている。前年度申請を試みたが、採用されなかった。そのため、やむを得ず当初想定した課題をできる範囲内で進め、国内史料を中心に報告書にまとめたい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）

明治維新史学会例会（2009 年 10 月 3 日、明治大学）「大名家の祖先顕彰と政治改革」

明治維新史学会大会（2009 年 11 月 14 日、神奈川県公文書館）「大名家の祖先顕彰と政治改革」

〔図書〕（計２件）

<u>岸本覚</u>「幕末萩藩における祭祀改革と「藩祖」」（井上智勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会２　国家権力と宗教』吉川弘文館、2008 年）pp135-158

笹部昌利編『幕末維新人物論』昭和堂、2009 年 <u>岸本覚</u> 担当「吉田松陰」「大村益次郎」pp25-44, 267-290